

勝林寺寺報

人間死んだらどこへ行くのか。あなたはどう考えますか。私はいざれ死んでゆかねばなりませんが、死んだらどこへ行くのか。あなたはどう考えますか。現代人の多くは、人間死んだらパーだ。すべてが消滅して何も残らない。せいぜい火葬の灰だけが残るぐらいだと考えているのではないでしょか。先年のある有名な知識人が『人間死んだらゴミになる』という本を書いて死んだことがあります。しかしながら、世の中には、人間は死んでも何かが残ると考える人もいるようです。人間が死んだら、その「タマシイ」が残つて宇宙に漂うと考えたり、またそれが別の生き物に生まれ変わつてゆくと考える人がいます。よく葬式の弔辞で「これからはどうぞ草葉のかけから見守つてください」というのは、そういう考え方からいうわけでしょう。人間の死後について、世間ではこのよろづ二種の考え方があるようです。

それについて、仏教ではどのように見るのでしょうか。仏教ではこのよろづ二種の考え方は、いずれもあやまりだといふのです。死んで何かが残るというのには有の見といい、死んだらパーでないも残らないといふのは無の見といい、いずれもあやまりだと教えます。仏教では人間の死後について、有の見、無の見をはなれようといふわけであります。とすれば、仏教では死についてどう教えるのでしょうか。

いま真宗念佛の教えによりますと、私たち凡人の知見では、死の向こうの世界は、とうてい

見ることができません。行く先は眞つ暗闇です。死後があるといい、無いとも、「タマシイ」が残るという、すべて凡人の浅はかな知恵で確かに仏法を聴聞し、お念佛をかさねて、まことに信心をううことができるならば、必ずその信心の智慧によつて、死んで行く先が確かに見えてくるようになると教えます。淨土に往生するといふ意味では、人間が死んだら何かが残る、何かに生まれ変わるというのと、真宗念佛を学んで、その信心の眼を通して淨土に往生するといふことは、まったく違うということを知らねばなりません。

そこで私は思います。私たちの生命には三種類あるといふことです。まず第一の生命とは、常識的に考えられる生命で、心臓が動き体が温かいことによって証明される生命です。それから第二の生命とは、私たちの肉体を構成する細胞の生命です。その細胞は一人の体によそ六十兆もあるといわれますが、この細胞の生命は心臓の生命とはまったく別でありそれはたいへん小さくて精巧な顕微鏡を通してこそ初めて見ることができます。そして第三の生命とは、先ほど申したところのまことの信心の智慧を通してこそ見えてくる仏さまの生命のことです、この永遠の生命をうるものだけがいつ死がやつてしまふ。死後は明るく何の不安もなく、死を迎えることができるようになるわけであります。

私たちをお互いに、そういう信心の智慧を、たしかにたしかにもちたいものです。
(信楽峻麿遺稿法語集より引用)

除夜会・修正会に お参りください

ご案内

早いもので、二〇一五年も残すところあとひと月となりました。今年の最後のひとときと新しい年のスタートを、阿弥陀様とともに皆で迎えましょう。各種雑煮、甘酒など温かいものを用意してお待ちしています。

除夜会

二〇一五年

二月三十一日 午後十時半より

お勤め

午後十一時半より 鐘つき

お勤め

二月（土）

横山誠宅

一三・二五回忌法要

三月（日）

出合

総仏講

八日（火）

市場

報恩講

四月（木）

野尻・矢根

報恩講

一日（火）	正法寺 報恩講
二日（水）	太田・東里 唐川 報恩講
三日（木）	奥小谷 報恩講
四日（金）	小田 托鉢 報恩講
六日（日）	小田 托鉢 報恩講

合同役員会

八日（火）	市場 報恩講
九日（水）	野尻・矢根 報恩講
十日（木）	横山誠宅 一三・二五回忌法要
十一日（金）	出合 総仏講
十二日（土）	矢根 報恩講

修正会

二〇一六年

一月一日 午前〇時より

お勤め

法話

二月（火）

丸中・片間 報恩講

三月（木）

兵庫教区 組長会

四月（火）

口小谷 報恩講

五月（木）

百合・桐野・寺坂 報恩講

六月（火）

鉢山・豊岡 報恩講

七月（木）

宮島義明宅 忌明法要

八月（火）

出石組 忘年会

九月（木）

みのりを聞く会

十月（火）

大掃除

十一月（木）

除夜会

二月（火）	正法寺 報恩講
三月（水）	太田・東里 唐川 報恩講
四月（木）	奥小谷 報恩講
五月（木）	小田 托鉢 報恩講
六月（火）	横山誠宅 一三・二五回忌法要
七月（木）	出合 総仏講
八月（火）	矢根 報恩講
九月（木）	口小谷 報恩講
十月（火）	百合・桐野・寺坂 報恩講
十一月（木）	鉢山・豊岡 報恩講
一二月（火）	宮島義明宅 忌明法要
一二月（火）	出石組 忘年会
一二月（火）	みのりを聞く会
一二月（火）	大掃除
一二月（火）	除夜会

ない、多くの因、多くの縁（間接的原因）が絡

み合つてはじめて生起する、無量の因と無量の

縁とが絡み合つてすべてのものは存在するとい

う考え方です。いまここにある私のいのちの不

思議さがありがたき、たくさんある私のいのちの不

思議さされであるこのいのちのありえないほ

仏教のはなし



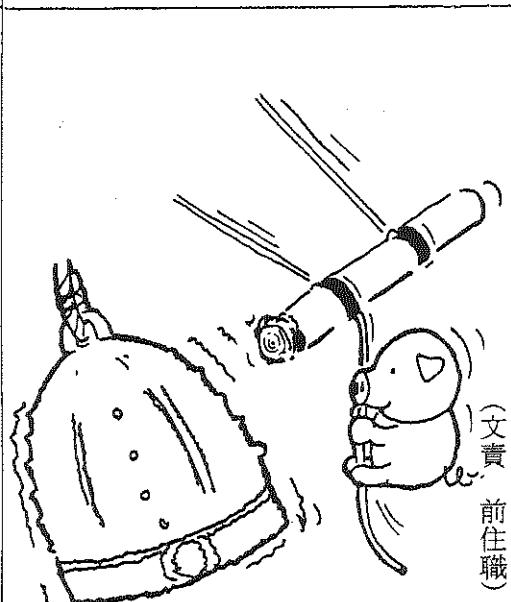
九十を超えると、古い記憶もあいまいになり、字引を引いたり、古書に当たって確かめたりすることができなくなりました。でも、今生の名残に、今の私にできる「仏教のはなし」をしてみたいと思います。

仏教は、「仏」（ゴータマ・シッタールタ、のちのお釈迦様）の教えです。インド北部のシャカ族の「淨飯王」と「麻耶夫人」の子供として生まれました。この一族は、遠くヒマラヤを超えて、中央アジアから来たアーリア民族ですが、インダス河中流に定着して、早くから農耕文化を作り、農村都市を築いた人たちです。なにしろ古い時代のことですから、記録などあるはずもなく、言い伝えか昔話（ジャータカ）で伝わるのみです。お釈迦様が亡くなつてのちに、弟子など後の人々がその教えを言い伝え、のちにできたサンスクリット文字で記録し、理論化、体系化して、いろいろな流派を作つていきました。

私は、今回は、なるべく原始のお釈迦様が説かれたであろう形の「原始仏教」を辿つてみたいと思います。

まず「縁起の法」、「存在論」です。「縁起」とは「因縁生起（いんねんしょうき）」ともいい、これ生ずるがゆえに、かれ生ず。これあるがゆえに、かれあり。これ存するがゆえに、かれ存す。これ滅するがゆえに、かれ滅す。などとも表現されます。なにものも、などとも、そのもの単独で生起存在するものはありえ

どのが難しきいのちなのです。生きていることに感謝する言葉「ありがとう」は、仏教徒の人達の「生観」です。また、最近よく耳にする「もつたいない」も、もともと仏教の思想から生まれた言葉です。「もつたい」は、「物体」や「勿体」と書き、私の意見とか私の考え方、私がという自己主張、主觀、主体の主張を意味します。「物体（勿体）ない」とは、「自己中心のものの見方のところにあるのではない」という意味です。うつかりすると気づかないけれど、私のいのちは、数えきれない因や縁に支えられていることに気づき、「おかげさまで」と生きようではないかと教えてくださるのが仏教です。このいのちの事実を、また、ちがつた言い方をすれば、はかりしれて「いのちの事実」「久遠の呼び声」に目覚めましょう。「帰命しましよう」というのが仏教なのかもしれません。これを、親鸞様は「眞宗（眞実の宗）」と名付けられたのです。



（文責 前住職）

生活の中で 念佛するのです

念佛の上に

生活がいとまれる

（前略）私たちは、日頃、聴（ちよう）聞（もん）をする時に、「ためになるお話を聞きたい」

「今日の話は参考になった」というように、仏法を利用するような聞き方をしていることがあります。さらに、念佛することで、迷いをなく

していこう、悩みを解決しようという思いで聞いているのではないかでしょうか。

聴聞の原点は、個人的な悩みや苦しみから始まります。むしろ、苦悩を抜きにした聞法は、

精神修養や教養としての学びになりやすく、それは理解が増えた分だけ、他人を見下したり、

自分の名利を満たすものになつたりします。そ

うなると、学ばない方がまだまだとうこと

はもうともと悩まねばなりません。人類のさ

まざまな問題が私たちに压しかかつてきている

のです。安っぽい喜びと安心にひたるような信

仰に逃避していることはできない。むしろそ

ういう安っぽい信仰を打ち破つていくのが淨土真

宗です」とおっしゃつたと聞いています。

「生活の中で念佛する」ということは、念佛を手段にして、苦惱をなくそう、たすからうとしている私たちのすぐたとも言えるのではないで

しょうか。しかし、それは本当の意味で私たちのすくいにはならない。むしろ、そういう個人的の思いを打ち破つていくような形で、私たち

歩ませるような如來の呼び声（念佛）が届く。

その念佛のはたらきに出遇い、歩んでいくすがたを「念佛の上に生活がいとなまれる」と表現

されています。

先月号の「頑張れ」以来、言葉について考えることがちよくちよくあります。今月も言葉のお話です。

「ハハ」にあつたヘアースプレイ知らん？」と息子がたずねます。いつも

ものいろいろにないので、近くを捜したが見つか

らず、私に助けを求めたように聞こえました。

私は「は」と、「そんなものは、彼以外使う者はいないのだから、きっとその近くにある」と確

信し、周辺をじっくり見まわし、ミラーの陰に潜んでいたのを見つけました。息子は「ありがとう」と言いながら、不思議そうなバツの悪そ

うな表情をしています。珍しくもない、よくある

我が家暮らしのひとことです。でも、この

ときは、私の中ではこれだけでは終わりませんで

した。「なぜ、彼は、私に『〇〇知らん？』と聞

いたんだろう」これがけつこう気になりました。

ただ見つからなくて探してほしいなら、「〇〇が

あれへん」という息子です。「う知らん？」と尋ねたのには、少し違和感をおぼえました。

自分に置き換えてみると、あるはずのものが定位

置くない時、自分がどこかへやつたとは、あまり考えません。安田理深先生が「私たち

はもつともと悩まねばなりません。人類のさ

まざまな問題が私たちに压しかかつてきている

のです。安っぽい喜びと安心にひたるような信

仰に逃避していることはできない。むしろそ

ういう安っぽい信仰を打ち破つていくのが淨土真

宗です」とおっしゃつたと聞いています。

「生活の中で念佛する」ということは、念佛を

手段にして、苦惱をなくそう、たすからうとしている私たちのすぐたとも言えるのではないで

しょうか。しかし、それは本当の意味で私たちのすくいにはならない。むしろ、そういう個人的の思いを打ち破つていくような形で、私たち

歩ませるような如來の呼び声（念佛）が届く。

その念佛のはたらきに出遇い、歩んでいくすがたを「念佛の上に生活がいとなまれる」と表現

されているように思います。

（保々眞量）